報 告 4

谷村城下町と近世の甲斐における動物資源利用

山梨県立博物館　植月　学

はじめに

平成26年から27年にかけておこなわれた谷村城の発掘において、多くの動物遺体が出土した。郡内地域の近世遺跡としては初めてのまとまった分析となる。本発表では谷村城出土動物遺体の概要を報告するとともに、同じ近世～近代に属する甲府盆地の甲府城下町遺跡、鰍沢河岸跡と比較することで、近世甲斐における動物資源利用のあり方について考察したい。

1．動物遺体組成の比較

(1) 貝類

アワビ、サザエ、ハマグリ、シジミ類が基本的なセットとなるが、甲府城下ではハマグリは少ない。鰍沢ではアカガイも多い。シジミ類以外は いずれも比較的大型の種であり、日常用というよりは、特別な機会に供された可能性が高い。シジミ類は報告によってマシジミとヤマトシジミの場合があるが、谷村城は主にヤマトシジミであった。マシジミであれば淡水で採れるが、ヤマトシジミは汽水産なので、沿岸部からの入手となる。

(2) 魚類（イルカ類を含む）

遺跡によるばらつきが大きい。鰍沢は大型のマグロ、サメ類、イルカ類などが主体となる。谷村城はマグロ属の多さは鰍沢と共通するが、鰍沢よりかなり小型である。両遺跡とも小型魚や淡水魚は稀である。これに対し、甲府城下はニシン科（マイワシなど）、アジ類などの小型魚が多い。グラフには現れていないが、ウナギ、アユなどの淡水魚も特徴的である。タイ科が多い点は谷村城と共通する。

こうした差が生じた原因として、第一に鰍沢は舟運により大型魚の輸送条件に恵まれていたことが考えられる。また、大型魚は城下へは解体された状態で持ち込まれた可能性もある。第二に、鰍沢の大型魚は流通条件が向上した近代を中心とした時期の産物の可能性もある。甲府城下の小型魚、淡水魚の多産については井戸、埋桶の水洗選別が実施された効果が大きく、他の2遺跡でも実施されれば検出される可能性がある。

(3) 哺乳類

3遺跡ともにシカ、牛馬の多さは共通する。その他の種では 谷村城ではノウサギ、甲府城下ではイヌ、鰍沢では多様な種が見られるが、カモシカ、イノシシなど野生獣が特徴的である。鰍沢ではツキノワグマも出土しており、カモシカとともに南アルプス山系に近い立地条件を反映している。

谷村城では近世遺構から牛馬は出土しておらず、いずれも近代の層からであった。甲府城下では多くの地点で調査が行われているが、やはり近世において牛馬が出土する地区は限られているのに対し、近代になると城に近いエリアから牛が出土した例がある。他地域の事例から見ても、近世城下、特に武家屋敷地では牛馬遺体は忌避された可能性が高く、他所で処理されたと推定される。一方、近代以降はこうした空間的規制は薄れたことが窺える。

2．加工の痕

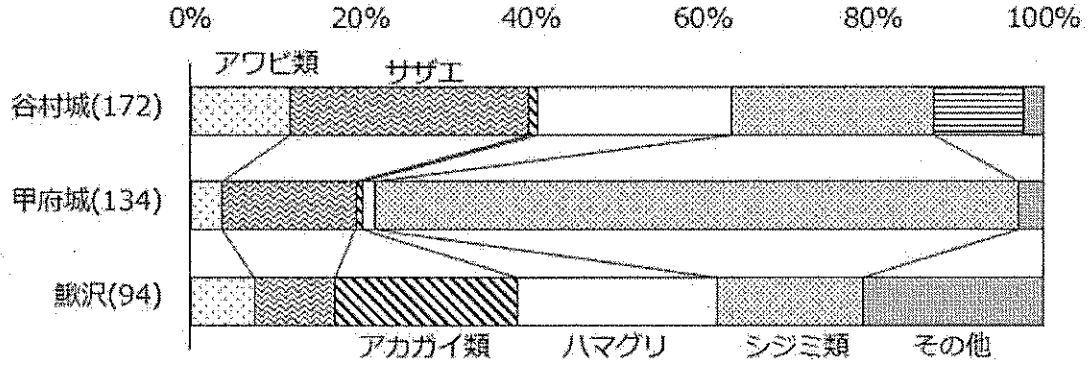
谷村城ではマダイ前頭骨を正中線付近で刃物を用いて切断した標本が確認できた。いわゆる兜割りの痕跡と考えられる。他に切痕を留める上後頭骨も確認されている。マダイは武家にとって縁起の良い魚であり、谷村、甲府両城下での多さは武家屋敷近辺での調理と消費を窺わせる。

道具素材に多用されるシカの中手・中足骨の端部に切込みを入れて切断、除去した標本も確認された。こうした事例は山梨ではまだ少ないが、甲府城下でもシカ落角の枝部を擦り切った例や、牛角に切込みを入れ、角鞘を取ったと考えられる例も見つかっている。城下における調理のあり方や、骨角細工の場を考える上で今後注目していく必要がある。

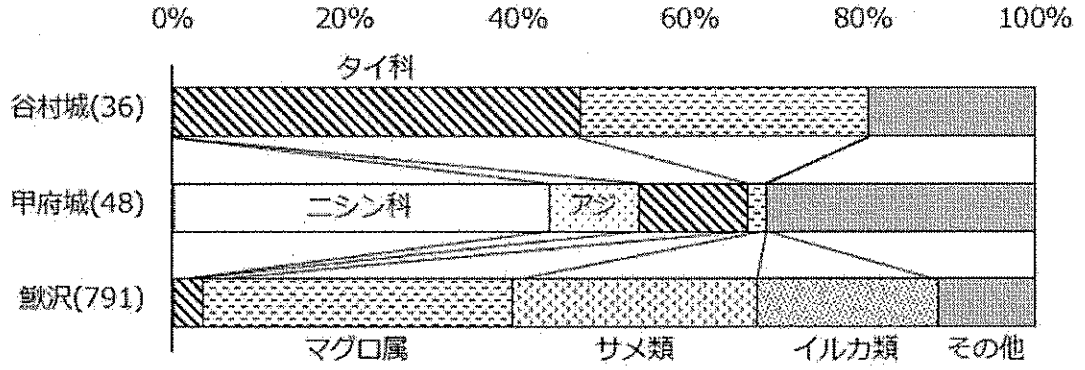
おわりに

今回の検討により、近世後期以降には甲斐国内の各地に多様な海産物が搬入されていたことが確認できた。また、城下での調理や骨角細工の存在、近世と近代での牛馬の扱いの差も示唆された。ただし、今回扱った資料は年代的に幅があり、遺跡の性格にも差がある。特に遺跡間の差異については、年代差なのか、遺跡の性格差によるのか判別できない部分があり、今後の課題としたい。

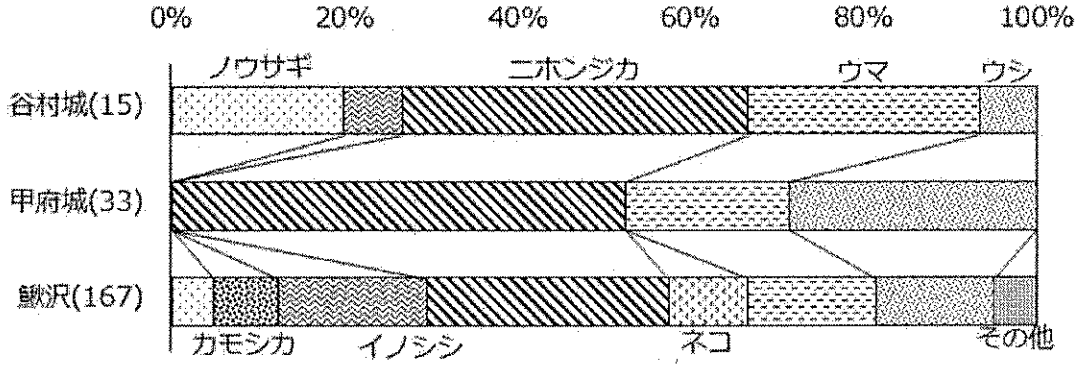
貝類組成

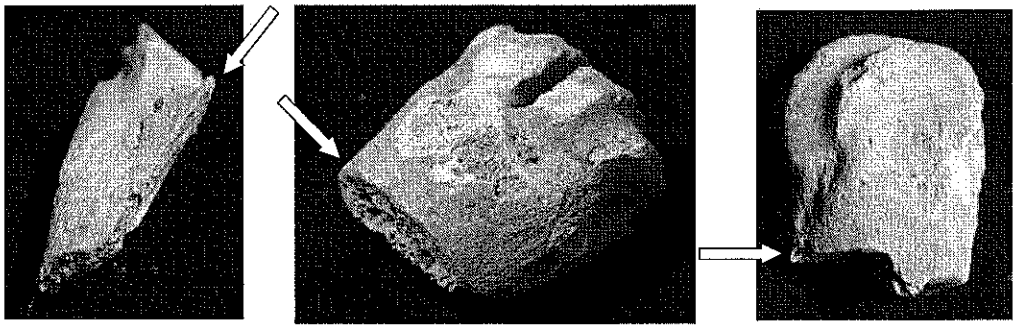


魚類組成



哺乳類組成





谷村城出土
切断痕のあるマダイ前頭骨（左）、擦切り痕のあるシカ中手骨（中・右）